第二言語習得過程における学習者の 読解ストラテジーに関する考察

○鴻巣努 (慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科)
鈴木美加 (東京外国語大学留学生日本語教育センター)
福田忠彦 (慶應義塾大学環境情報学部)

A Consideration on the Reading Strategy in Learning the Second Language

○Tsutomu Konosu (Keio Univ. Graduate school of Media and Governance)
Mika Suzuki (Tokyo Univ. of foreign studies
Japanese language center for international students)
Tadahiko Fukuda (Keio Univ. Faculty of Environmental Information)

1 はじめに

現在までの第二言語としての日本語教授法の開発は、教育現場での経験によるところが大きく、学習者の読解ストラテジーに着目した実証的研究が少ないのが現状である。これまでに、アイカメラを用いた研究によって中級・上級学習者に関しては、文章内容による読みの精粗性および漢字系学習者の母語偏重等^{1) 2)}が指摘されているが、初級学習者を対象とした研究は少ない。初級学習は語彙・構文レベルの習得を中心に行われ、文構造の処理や文章の整合性への配慮などが重要な中級段階への基礎となる非常に重要な段階である。これまでに既習の事項についても処理の速さ・正確さ等には初級段階からかなりの個人差があることが明らかになっている。この時期の学習者の読解に着目し、適切な指導を行うことは非常に重要である。

本研究の目的は、外国語学習者の読解の際の眼球運動を初級からのカリキュラムの進行とともに測定・分析し、学習者の読解ストラテジーに合った指導法開発への基礎データを提供することである。

2 実験方法

実験はカリキュラムの進行に沿って年間3回実施された。実験を行った時期のカリキュラム進行

状況は図1の通りである。

図1 実験時のカリキュラム進行状況

各回とも 180字～ 220字程度の漢字にルビを付けた刺激を2種類用意し、それを読んでいる時の学習者の眼球運動を測定した。刺激の内容は毎回異なるが、語彙レベルや文構造等を考慮し、難易度に著しい差がないよう配慮した。被験者は東京外国語大学留学生日本語教育センターの学生であり、国籍は次の通りである。

ルーマニア	1	モンゴル	1
インドネシア	1	マレーシア	2
ホンコン	1	ヴェトナム	1
フィリピン	2	ソロモン諸島	1

刺激は被験者から160cm離れたモニター上に提示し、眼球運動の測定にはEye Movement Monitor (株式会社竹井機器工業)を用いた。実験後には、文章内容の理解度を口頭質問によって調査し、内容理解が著しく劣っている者については分析の対象外とした。

3 結果と考察

3.1 所要時間

図2に眼球運動の移動軌跡から測定した刺激一読終了までの所要時間の実験回ごとの平均値と標準偏差を示す。文章の長さの影響を取り除くため、全ての値は計測値を文字数で除算したものである。

図2 所要時間

第1回と第2回の平均値は有意水準5%のt検定において有意差が認められたが、第2回と第3回の間には有意差が認められなかった。読了までの時間は学習能力を計る指標となるが、実験データから初級から中級段階における能力向上がそれ以後に比べ大きいことが明らかになった。

3.2 注視回数

図3に一読終了までの1文字あたりの注視点数の平均値と標準偏差を示す。

図3 注視回数

注視回数も所要時間と同様に第1回と第2回の

平均値の間には有意水準5%で有意差があったが、第2回と第3回の間には有意差がなかった。同様に注視点の停留時間に関する分析を行った結果、停留時間には各実験間に有意差はなかった。ここから、前述の読解時間の縮減は注視回数が減ることに起因していることが分かった。これは、日本語能力の向上に伴って、1回の注視によって受容する文字数が上昇する事によって考えられる。初級段階の学習者は文章を文字単位で認識するボトムアップ的読解戦略をとる者が多数であるのに対し、中級段階からはトップダウン的戦略を部分的にとり始める傾向が見られた。第2回の実験から移動距離の長い視線の逆行が観察されたこともこれを裏付ける。初級から中級段階に移行する際、このように読解戦略に大きな変化が起こっていると推察され、教育上もこの点に配慮した学習支援を行う必要があると考えられる。

3.3 母語の影響

漢字系学習者の母語偏重傾向は以前から指摘されている日本語学習上の問題点である。今回の被験者には4名の漢字系学習者が含まれているが、一部の被験者にこの傾向が見られた。教育現場においても漢字系学習者のカリキュラム進行に伴う母語偏重傾向が指摘されている。漢字偏重による読解は日本語特有の文構造や助詞の機能等を無視した読解に繋がり、一度陥ると、上級以降においては修復不可能である場合が多い。漢字偏重傾向の小さい漢字系学習者との比較によってこの解決策を見出だすことが可能であると考えられる。このことは初級段階から客観的手法によって学習者の読解ストストラテジーを分析することの重要性を傍証するものである。

参考文献

- 1) 重松洋, 減梨勢: アйкаメラによるNon-nativeの読みに関する実証的研究, 平成5年度日本語教育学会講演集, 31-36, 1993.
- 2) 重松洋, 減梨勢, 堀田忠彦: アйкаメラによるNon-Nativeの読みに関する実証的研究(第2報), 平成6年度日本語教育学会講演集, 92-95, 1994.